

新しいシンボル

鉄骨造や鉄筋コンクリート造による大スパンの建物には組積造に基づく様式建築はそぐわなかった。

新しい建物にふさわしいデザインが追求されたのは、用・強・美を本質とする建築にとってごく当たり前の進歩だった。

photo: Hitoshi Kumamoto



column

建築家 鈴木禎次

【名古屋をつくった建築家】

明治後期から昭和初期にかけて、名古屋で活躍した建築家鈴木禎次は、明治3年に静岡県静岡市で生まれました。帝国大学の造家学科（現在の東京大学建築学科）では辰野金吾の教えを受け、大学卒業後は三井銀行の建築係に就職しました。

また鈴木の子と夏目漱石の子が姉妹だったことも有名で、漱石の日記にたびたび登場しています。鈴木は漱石の死後に、墓石のデザインも手がけています。

明治38年に名古屋高等工業学校（現在の名古屋工業大学）の教授になると、建築家としての辣腕を振るい、広小路通沿いなどに多くの建物を設計しますが、当初は名古屋があまりに田舎だったため、ずいぶん落ち込んだそうです。

名古屋の財界人にとっても本格的な建築家は得難い人材で、特にいとう呉服店（現在の松坂屋）の伊藤次郎左衛門祐民との関係は深く、「いとう呉服店」や「伊藤銀行」、「松坂屋本店」などを手がけています。

そうした大きい建物を設計する一方で、印象深い住宅作品も残しています。半田の「旧中埜家住宅」は、まだ四十代だった鈴木が手探りで設計した住宅で、繊細なベランダが美しいユニークな作品です。

また名古屋市覚王山にある伊藤家別邸の揚輝荘内の「伴華楼」では、尾張徳川家の建物の移築と増築を手がけています。

現存する建物は少なくなりましたが、鈴木禎次の建築は今も変わらず愛知県のまちのシンボルとして愛されています。





photo:Hitoshi Kumamoto

堂々とした表現主義的な外観。以前の底は鉄製だったが戦中に供出され、昭和30年の増改築の際に取り付けられた

名古屋市公会堂

鶴舞公園に堂々とたたずむ、名古屋近代建築を代表する文化の殿堂



舞台との距離感が近く臨場感のある大ホール

「大きさ」という特徴

名古屋市の鶴舞公園には大きな塊のような公会堂があります。焦茶色のタイルで覆われ、窓は小さく、コーナーには丸みがつけられているため、よりいっそうボリューム感が強調されています。

名古屋市公会堂は、昭和5年に竣工して以降、講演会や催事、音楽イベントなどに活用され続けてきた、名古屋を代表する近代建築です。

当初のデザインが復元されました。

また最新の音響設備やデジタルシネマプロジェクターを取り入れ、現在のライブや映像の上映にも対応しています。その一方で、舞台にある湾曲した壁面「クッペルホルゾン」はそのまま残されました。

建設から長い年月が経ち、戦禍や米軍の接収にも耐えてきた名古屋市公会堂は、今も変わらず名古屋の文化を支えています。その揺るぎもない堂々とした姿に、敬意を払わずにはいられません。

また建物の特徴である大きさは、鉄骨造や鉄筋コンクリート造の発達で可能になった近代建築の技術です。名古屋市公会堂には建設当時2700人を収容できる大ホールがあり、これは同時期の日比谷公会堂や大阪中央公会堂に比肩する大きさで、延べ床面積では両者を凌駕しています。

市民の寄付で建てられた公会堂

名古屋市公会堂の建設は、昭和天皇の御成婚記念事業に端を発します。その当時、公会堂の建設は各地で求められ、また名古屋は人口が100万人に迫り、中川運河の開削や上下水道設備の拡張など、まちが大きく変革した時代でもありました。

その影響で、市の予算だけでは建設費が賄えず、市民による寄付を募った結果、完成までに7年を要しました。昭和3年に鶴舞公園で開催された御大典奉祝名古屋博覧会の時には、鉄骨が剥き出しの状態だったといえます。

表現主義的なデザインとタイル

昭和初期の名古屋では、セセッションやドイツ表現主義のデザインが参考にされたといわれています。名古屋市公会堂は後者の代表

作で、全体を

大きな塊のようにつかひ、またアーチを多用するなど曲線を取り入れている点も表現主義に倣っています。



3階の和室。普通の和室よりスケールが大きい

一方、内部空間では、大ホールのほか2階の集会室（旧婦人室）や3階の和室、4階の特別室などバリエーション豊かな部屋が用意され、市民の要望に応えられる機能が備えられました。

その中でも魅力的なのが館内をめぐる廊下です。とりわけ大ホール前の幾何学模様で敷かれたモザイクタイルが美しいです。それらタイルに、階段やバルコニーの窓からの光が染み渡り、荘厳な雰囲気を漂わせています。

名古屋の文化の殿堂

平成31年、名古屋市公会堂は、耐震補強などと合わせて大ホールの改修を行いました。座席数を減らしてゆとりを持たせ、椅子は



大ホール前のモザイクタイル

1930年（昭和5年）
鉄骨鉄筋コンクリート造4階建て、地下1階
「設計」名古屋建築課
名古屋昭和区鶴舞1丁目1-3
<https://nagoyashi-kokaido-hall.info/jp>



平成9年に復元された奏楽堂。創建時は木造だった

歴史ある公園と新しい憩いの場
鶴舞公園内には他にも、名古屋博覧会の時に建てられた鶴々亭や普選記念壇があり、南東部には国指定史跡の八幡山古墳もあります。また、100年の歴史を重ねてきた鶴舞

博覧会と公園の整備
鶴舞公園の造営は、明治43年に開催された第十回関西府県連合共進会の会場整備に合わせて進められました。それは、この辺り一帯が田んぼの多い湿地帯で、ちょうど明治38年から開削が進んでいた新堀川の土砂を埋め立てに利用できたからです。
ちなみに共進会とは、産業の発展と交流を図るために設けられた製品を品評する会で、明治政府の殖産興業の一環で開催されました。

共進会の終了後、日本の「公園の父」といわれる造園家の本多静六と鈴木禎次の設計で進められ、起伏の少ない西側を幾何学的な近世フランス式の回遊式庭園に、東側は緩やかな丘陵を活かした和風の庭園に整備されました。

鈴木禎次の最高傑作

公園の中には、共進会の折に建てられた噴水塔と奏楽堂の二つの建物が残されています。両方とも鈴木禎次の設計によりですが、奏楽堂は平成9年に復元されたものです。
その内の噴水塔は、数ある鈴木建築の中でも最高傑作と呼べるもので、古典主義様式の構成が美しい作品です。よく晴れた日には、頂部の水盤から八方向に注がれる水が軒先に当たって飛散し、円形の塔の白いドリスオーダーと内部の空間をキラキラと輝かせて、まるで神殿のような姿を見せてくれます。



新しく整備された TSURUMA GARDEN area1

国登録記念物 鶴舞公園

歴史的な博覧会が開かれた、名古屋市営第一号の都市公園



photo:Hitoshi Kumamoto/Ryota Murase/Tomio Ishida/Akihiko Mizuno

噴水塔遠景。右手側が正門、左手側に和風庭園がある。土日には催し物が開かれ多くの市民で賑わう

名古屋の近代化のシンボル

名古屋にはまちの近代化の象徴とも称される公園があります。それが鶴舞公園です。明治42年に造営された鶴舞公園は、名古屋市の最初の公園というだけでなく、関西府県連合共進会と御大典奉祝名古屋博覧会という2つの重要な博覧会が開催された会場でもありました。

公園の設計に携わった建築家の鈴木禎次は、後にこれら博覧会が名古屋が発展を遂げるターニングポイントになったと述懐しています。

現在、鶴舞公園はそのような歴史的背景から、国の登録有形文化財記念物となっています。



午後の光を受けて輝く噴水塔



photo: Hitoshi Kumamoto

印象的な外観。両脇の角屋の存在がファサードを引き立たせる。モダンな窓枠も美しい

豊橋市公会堂

路面電車沿いに悠然と構える、豊橋のシンボルの近代建築

公会堂ができるまで

大正の終わり頃、全国各地で討論会や講演会が行える公会堂の建設が求められました。そんな折、豊橋市では地元の豊橋電気株式会社と名古屋電灯株式会社の間で合併の話が持ち上がり、市議会を巻き込んだ論争へと発展しました。結局両者の折り合いがつかず、知事の仲裁で名古屋電灯が公会堂を寄付することが提案されました。

その後、公会堂建設は市会騒乱事件で収縮しますが、昭和3年に御大典奉祝記念事業として再燃し、豊橋市制25周年記念で完成に至りました。

まちの顔としてのファサード

かつて路面電車は豊橋市公会堂の正面から迫り、ファサードがビスタ（景観の目印）のような役割を果たしていました。

大階段を上った先の玄関には、天井にクロスヴォールトが架かり、列柱と合わせてアーケードのような空間となっています。

この建物は仕様書に「近世式」と記されていますが、ドームや軒下のアーチの連続する装飾など、ロマネスク様式やスパニッシュ様式の意匠も散見できます。

設計者の中

村與資平は浜松を拠点に活躍した人物で、様式建築に精通し、静岡市庁舎や静岡県庁舎も手がけた、地元が誇る名建築家です。

その手腕は

内部空間にも発揮されています。塔屋内を巡る手すりの美しい螺旋階段や、その横の円形窓から眺められるアーケードと列柱の造形も見事です。



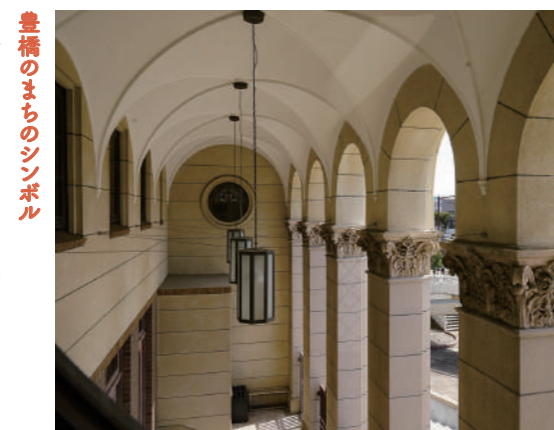
ホール全景。舞台上の照明器具は垂で上げ下げする

隠れた見どころは、ホールの奥にある3階の楽屋です。角部屋のため窓が多く、演者用の大鏡がそれを写し込んで不思議な空間となっています。

また昭和天皇が訪れた3階の貴賓室も重厚な内装が残されています。

鷺の謎

ところで豊橋市公会堂の鷺に関しては謎があります。かつて背後にある吉田城跡に



円形窓から覗いたドリス式列柱とクロスヴォールトの眺め

豊橋のまちのシンボル

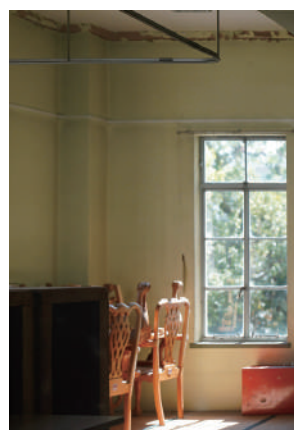
路面電車の走る豊橋の市街地で、沿線にひととき目を引く立派な建物があります。正面には大きな階段がそびえ、その先にはコリント式の柱頭を持つ角柱が立ち並んでいます。また頭上には左右に二つイスラム風のドームをいただき、その四隅には鷺が翼を広げています。

豊橋市公会堂は、まちのシンボルとして愛され続けている名建築です。

は陸軍歩兵第18連隊が置かれていたことから、軍都の象徴だと囁かれていました。その一方で、鷺は陸軍の紋章ではないため、否定する意見もあります。

紋章でいえば、鷺は羽毛の形状から黒鷺と考えられ、それはロマノフ王朝の紋章を想起させます。豊橋には豊橋ハリストス正教会聖堂があり、日露戦争後にロシア人捕虜が多く移されていました。鷺が象徴的に据えられているのは、その辺りに秘密があるかもしれません。

それら歴史の謎への探究は、まちのシンボルならではの醍醐味といえるでしょう。



不思議な雰囲気漂う3階の楽屋

1931年（昭和6年）
鉄筋コンクリート造3階建て
「設計」中村與資平
豊橋市八町通2丁目22
<https://www.bunzai.co.jp/publicna/>



光源のある灯室

岸を走る国道274号から20 m程度しか離れておらず、また基礎部が2 mほど岩礁から高くなっているため、地上から立ち上がっているように見えます。

そして美しいフォルムも特徴的です。高さ19 mのすらりとした白い姿は、下から上に向かって徐々に細くなり、その艶かしいラインは、ギリシア建築のイオニア式オーダーの円柱のような美しさを感じられます。

灯塔の上には踊場が巡り、光源のある灯室がちよこんとついている姿も愛嬌があります。このような美しいフォルムの灯台が空と海を背景にたつ姿は、他の建造物にはない感動を与えてくれます。

夕日の沈む絶景

基礎部の階段をあがり、暗闇の中の螺旋階段を丸窓の光を頼りに上へと登ると、狭い入り口の先に灯室があります。中心には灯器が置かれ、下部の出口から這い出れば、目の前に広がる絶景に思わず息を吞みます。海岸にたつ

美浜まちらボと登れる化プロジェクト

野間埼灯台は、この辺りが人気の海水浴場だったこともあり、建設当初から観光名所として知られていました。その頃は常駐していた灯台守が塔内へ登らせてくれたといえます。再び登れるようになったのは近年のことで、地元で活動する「美浜まちらボ」の働きかけにより実現しました。彼らは海上保安庁の許可を取ってライトアップを行ったり、灯台前の駐車場でイベントを行ったりして、周知に努めました。また野間埼灯台100年の記念事業として国登録有形文化財への登録を果たし、記念誌も作成しました。

その一環で進められたのが「野間埼灯台登れる化プロジェクト」でした。メンバーたちの粘り強い活動と熱い思いが結実して、2022年から一般公開され、土日限定で灯台へ登ることができるようになりました。



灯室と伊勢湾の絶景

灯台ならではの景色です。

もうひとつ紹介したい絶景が夕暮れの野間埼灯台です。背後に広がる伊勢湾に夕日が沈み、そこにたつ灯台の姿は美しくてちょっぴり切ないです。

野間埼灯台は、灯台という建造物の良さを十二分に味わうことができる稀有な建築です。

Nomasakitôdai

登録／2022年6月
登録基準／
国土の歴史的景観に
寄与しているもの

1921年(大正10年)
コンクリート造(無筋)
1999年炭素繊維巻立工法にて耐震補強
美浜町大字小野浦字岩成20-1
<https://romance-toudai.uminohi.jp/toudai/nomasaki.html>



灯台の全景。2 mの基礎部から19 mの灯台が伸びる。伊勢湾とたたずむ素晴らしい風景

野間埼灯台

伊勢湾を望む、愛知県最古の美しい灯台

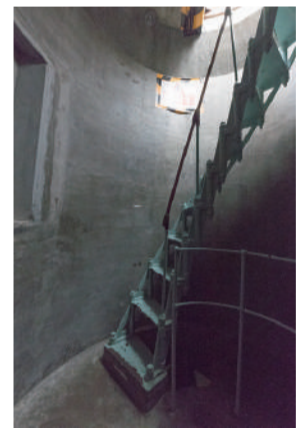
灯台略史

伊勢湾を望む知多半島の西端に、県内で稼働する灯台の中で最も古い野間埼灯台がたっています。海岸からすくと立ち上がる白亜の塔は、背後に広がる水平線と合わせて美しい風景をつくり、とても人気のある観光スポットとなっています。

日本の灯台の歴史は江戸末期に始まりますが、それらは当初、お雇い外国人の手によって設計されました。愛知県には博物館明治村に移築された、フランス人技師ヴェルニーによる国内最古の品川燈台(とんだい)があります。

野間埼灯台の美

野間埼灯台の魅力の一つが、ロケーションの素晴らしさにあります。灯台のたつ場所は治



塔内部の螺旋階段

重要文化財名古屋テレビ塔

戦後復興のシンボルから、まちの永遠のシンボルへ



photo: Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

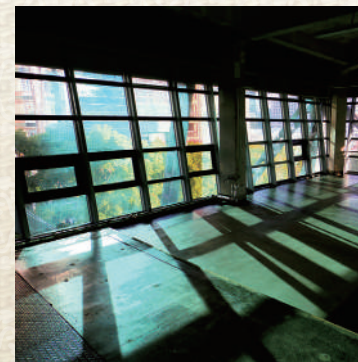
鉄骨で組み上げられた美しいフォルム

復興のシンボル

名古屋の中心を走る久屋大通の真ん中で銀色に輝く名古屋テレビ塔は、戦後復興のシンボルともいえるべき素晴らしい建築です。

戦前の名古屋は、三菱重工業をはじめ軍需産業の一大拠点で、戦火の折には60回以上の空爆を受ける壊滅的な被害を被りました。

そんな荒廃したまちに建設されたのが、新しい大衆文化であるテレビの送信アンテナを集約した名古屋テレビ塔でした。また建設用地に久屋大通公園が選ばれたのは、戦災で焼け落ち



改修前の建屋。予想外の場所から光が差す

た名古屋城に代わる観光名所となることが求められたからでした。

前例のない集約電波塔

名古屋テレビ塔は、建設当時、電波塔としても前例のない建物でした。設計者の内藤多仲は戦前に多くのラジオ塔を手がけたスペシャリストで、その経験をもとに全高180mの自立式鉄塔の設計に挑戦しました。

条件としては、風の影響を受ける高所でのアンテナの固定や、地下鉄が通るため基礎杭



免震工事中の柱の基礎部

が打てないこと、また送信施設を塔体にドッキングさせるなど難しい条件が課せられ、内藤は設計を何度もやり直したといえます。

出来上がったデザインが、頂部まで伸び上がる4本の柱とそれを繋ぐ三角トラス、また柱の基礎同士を地中梁で連結させ、放送施設を低層部に組み込んで交差アーチで支えるなど、構造的に無駄のない現在に見る姿でした。

内藤はデザインの出来栄を、晩年まで満足げに語っていたそうです。

重要文化財への道のり

建設から半世紀以上が経ち、名古屋テレビ塔はアナログ放送の終了を迎え、電波塔としての役割を終えました。その後の活用について、名古屋テレビ塔株式会社と名古屋市、そして日建設計が協議を重ね、新しい文化施設としての転用を目的とした改修工事計画が立てられました。

改修工事でポイントとなったのが、建物のかたちを変えないで耐震性を増す工法の検討でした。10年の試行錯誤を経て、柱を地中スレスレでカットして免震装置を入れる工法が採用されました。

都市空間と共にある姿

工事の際に、同時に行われた久屋大通公園の再整備計画もまた画期的でした。ここでの計画が都市公園法の改正を促し、また民間による公園の管理運営制度「Park+」が採用されたからです。その背景には、かつて愛知県と名古屋市が協力して道路法や都市公園法などの難題を調整した実績が、今も受け継がれているからです。

2022年、名古屋テレビ塔は重要文化財に指定され、その姿が今後も保存されることが決まりました。戦後復興のシンボルは、まちの永遠のシンボルとして生まれ変わったのです。



同時に改修工事した久屋大通公園